

3月28日 神戸新聞 [「他人 iPS 世界初移植 高橋氏会見「まだ始まり」」](#)

他人の人工多能性幹細胞（iPS細胞）を使った世界初の移植手術が28日、神戸市立医療センター中央市民病院（同市中央区）で行われた。本人の細胞を使った1例目の移植から2年半。「夢の万能細胞」による再生医療は、他人の細胞を使う方法へとかじを切った。理化学研究所多細胞システム形成研究センターの高橋政代プロジェクトリーダーは「やっと富士山の5合目。まだ始まりのよう」と、実用化に向けて気を引き締めた。（夢の万能細胞は、永遠に夢の万能細胞に終わりそうな気がします。嫌味な言い方をすれば、「夢のまた夢の万能細胞」となるでしょう。だからこそ高橋リーダーも「まだ始まりのようだ」と発言されたと思います。なぜならば、拒絶反応と癌化の問題については一切答えが出ていないからです。）

手術から約3時間後、高橋氏が記者会見場に姿を見せた。前回のジャケット姿と違い、白衣姿。手術が無事、終了したことを報告し、「ここから急峻（きゅうしゅん）な山頂までの道がある。（他人の細胞を移植した）今回はこれからの拒絶反応が問題」と緊張感をにじませた。「手術だけでこの治療の成否は言えない」と、予定する5人程度の移植を終えるまでは、経過の発表を控えたいとし、理解を求めた。（手術自体は簡単なのです。なぜならば人工網膜色素上皮細胞の懸濁液を黄斑あたりにばらまけばいいのですから。その懸濁液に含まれている人工網膜色素上皮細胞の数は25万個といわれていますが、その懸濁液を眼底にばらまくことは、優れた眼科外科医であれば簡単にやれるはずですから。）

執刀したのは、1例目と同じ同病院の栗本康夫眼科部長。「今回の方法は、リアルに普及できるような治療法。絶対に成功させる信念を持って臨んだ」と前を見据えた。拒絶反応は手術後2週間、数カ月、半年たっても出る場合があるといい「気を抜かずにやっていきたい」と話した。（やはり栗本先生も手術よりも手術後の拒絶反応を気にしておられます。当然のことです。）